

Title	大学におけるハッカソン実施の試み：ハッカソン研究会の活動
Author(s)	木戸, 冬子; 平本, 健二
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 138-139
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13244
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

1 F O 1

大学におけるハッカソン実施の試み-ハッカソン研究会の活動-

○木戸冬子（東京大学大学院情報理工学系研究科）
平本健二（東京大学公共政策大学院・内閣官房）

1. ハッカソン研究会

ハッカソン研究会は、特定非営利活動法人グローバル・ビジネス・リサーチ・センター（GBRC）[1]のコンピュータ産業研究会[2]の派生研究会として2015年7月1日付で設立された研究会である。

ハッカソン研究会では、ハッカソンを経営科学の研究対象と考え、ハッカソンを運営する、または研究対象とする大学教員・実務家・学生が集まり、発表、意見交換、コミュニティ形成を中心に活動する。

ハッカソン研究会の活動内容は以下のとおりである。

- (1) ハッカソンの事例の発表および事例研究
- (2) ハッカソンにおける問題解決プロセスの研究
- (3) ハッカソンによる意思決定の研究
- (4) ハッカソンの最新動向の調査・研究
- (5) ハッカソンによる産学官の交流
- (6) ハッカソンが職場や教育の場にも与える効果、モチベーションの向上等に関する評価方法の確立
- (7) ハッカソンによる人材育成
- (8) ハッカソンによる社会課題の解決

2. ハッカソンの分類

本研究会の研究対象であるハッカソン(Hackathon)は、HackとMarathonを組み合わせた造語である。現在、日本では広義にハッカソンという名目で多くのハッカソンが開催されており、ハッカソンを分類すると以下のように分類される。

実施主体による分類：

- ・ 公共課題解決ハッカソン
- ・ 企業ハッカソン
- ・ 大学ハッカソン

内容による分類：

- ・ (狭義の意味の) ハッカソン
- ・ アイデアソン
- ・ その他
 - データソン
 - ビジュアルライズソン
 - シンカソン
 - 市民参加ワークショップ
 - マッピングパーティ

実施方法：

- ・ 1日
- ・ 複数日
- ・ コンテスト

3. 大学ハッカソン

海外における大学で開催事例としては、Stanford University d.school[3]、MIT [4]、University of Pennsylvania[5]などで、実施されている。また、我が国における大学での実施実績としては、2014年4月にお茶の水女子大学とマイクロソフトとの連携による国際女性ハッカソン大会コンテストの日本大会 International Women's Hackathon 2014, Japan [6]、Tea Time Hackathon (TTH) [7]と

JPHACKS[8]の2種である。

4. ハッカソンの成果活用

ハッカソンの1つの課題として、成果の実世界への反映がある。アイデアを育て、知識を実世界に反映（成果を活用）するには、図1が示すように、成果の活用し更にビジネス化のためには、「運用主体」、「資金」の確保が課題である。これらの確保により、ハッカソンが単なるプロトタイプに終わらず、実世界への反映が実現する、



図1：アイデアを育て、知識を実社会に反映するには

5. むすび

ハッカソン研究会では、ハッカソンの成果を実世界に反映する試みとして、今年度開催予定のJPHACKS2015（ハッカソン：2015/11/28-29，ミートアップ：2015/12/12）運営を後援する。

JPHACKSは、2014年に第1回を開催して、232名の応募者と選抜された120名の参加者を得て、ハッカソンとして国内最大規模の学生の参加を得て実施した。JPHACKS2104の運営には、著者の木戸が主催者として関わったが、昨年度参加した学生からのフィードバックとして、「成果を実世界に反映するための出口がないこと」、「評価軸の明確化（技術レベル評価）」の2点が課題として残った。

この課題を解決するため、JPHACKS2015では、出口の課題に対しては、「運用主体」、「資金」の確保のためにこれらを支援に協力的な企業に支援を求め運営準備をしている。評価の課題については、事前に評価委員会を設置し、技術レベルの評価には、評価委員長に前情報処理学会会長の喜連川 優氏、副評価委員長には、著者の東京大学 平本 健二が担い、評価基準についても見直しを検討している。ハッカソンの評価については、先行している海外においても明確な指標が得られていないので、今後の重点課題としたい。

参考資料

- [1] <http://www.gbrc.jp/>
- [2] http://www.gbrc.jp/journal/amr/ws_comp.html
- [3] <http://dschool.stanford.edu/hackd/>
- [4] <https://www.hackmit.org/>
- [5] <http://2014s.pennapps.com/>
- [6] <https://atnd.org/events/49368>
- [7] http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/events/tt_hackathon/
- [8] <https://JPHACKS.com/>